

日高山脈に「氷河」があったころの暮らし

第1章 十勝の平野や川ができるまで



発掘中の若葉の森遺跡(帯広市)とそのむこうに見える帯広市街地。かつては、この市街地のあるところが、十勝川の氾濫原だった。

(写真: 帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵: 2)

2万4千年以上前、今の若葉小学校(帯広市)の南にある丘の上で、人が暮らしていました(若葉の森遺跡)。当時のがけの下には、十勝川に流れこむ小川が流れていました。ここから、ずっと北の芽室町西土狩のあたりまで、大小の川が流れる平地(氾濫原: p46)でした。川の水量は少なかったようですが、たまにある大洪水では、がけの下まで「湖」のように水がたまりました。今よりずっと寒いころ(氷期)で、日高山脈には氷河がありました(p52)。

きびしい自然の中、当時の人はヤリを持って動物の群れを追いながら、たくましく生きていました。石器の材料である黒曜石は、十勝川をわたって音更川下流の河原でひろってきました。

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、今、そして未来へ

用語

さくいん



(上)川西C遺跡(帯広市)での発掘(平成9年)。右後ろは稲田小。



川西C遺跡で見つかった礫器(左)と顔料のもと(右)。

ベースキャンプ

旧石器時代の暮らしは、キャンプ生活です。キャンプの中には、比較的長くとどまって狩りの準備をする「ベースキャンプ」があります。

およそ2万1千年前、稲田小学校(帯広市)の南側は、このベースキャンプだったようです(川西C遺跡: p82)。

ここには、「石刃」という細長くてうすい石器がたくさん持ちこまれ、これを加工して新たな石器が作られていました。大きな石(最大3kg)のかたほうに刃を作った「礫器」も作られています。(石刃写真 p92)

そのほか、赤や黒の「顔料(絵の具)」が使われ、たき火もおこなわれていました。

(写真: 帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵)

丘の上で石むし料理

芽室高校がある丘のへり(大成遺跡: 芽室町)や、とかち帯広空港近くの上似平(上似平遺跡: 帯広市)では、およそ2万年前に「石むし料理」がおこなわれていました。



上似平遺跡の石むし料理のあと。(写真: 帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵)

石むし料理は、食材を葉っぱなどで包み、焼いた石(焼き石)を使って熱する調理法です。

焼き石を使うと、じっくり時間をかけて熱を伝えることができます。食材の中まで火を通すことができる、とてもすぐれたやり方です。



石むし料理。石の上で火をたき、火を消したあと上に葉っぱをしいて食材をのせ、さらに葉っぱや土(ここではブルーシート)をかぶせる。

(写真 ~ : 平成16年の「水がきジャンボリー」)

1 焼き石(やきいし): 焼き石は熱をゆっくりと放つので、現在でも料理に利用される。焼き石による石焼きイモは、ベータアミラーゼが活発に働く温度を保つことによって、独特な甘みを出すことができる。韓国料理の石焼きピビンバは、どんぶりが焼き石とな

っている。新潟県の佐渡(さど)ではアユの石焼きが名物料理となっており、同じく新潟県の粟島(あわじま)では、「わっぱ」とよばれる木製のおけに水と具を入れ、そこに焼き石を入れて煮立たせる「わっぱ煮」という名物料理がある。

十勝で最も古い遺跡... 若葉の森遺跡

「若葉の森遺跡」は、今（平成19年）のところ、十勝で（そして北海道で）最も古い遺跡で、2万4千年前より古いことがわかっています。

若葉の森遺跡の発掘で見つかった石器は、帯広市の「帯広百年記念館埋蔵文化財センター（西23条南4丁目）」で見ることができます。

まだ、発掘されず地下にねむっている部分も広く残っています。

このほか、およそ2万年前の古い遺跡としては、嶋木遺跡（上士幌町）や共栄3遺跡（清水町）、勢雄遺跡（更別村）などがあります。

これら古い遺跡は、およそ1万8千年前に降った恵庭岳の火山灰（p58）より、下の地層から見つかっています。

若葉の森遺跡の地層、恵庭火山灰（白線内）の下から石器が見つかった（矢印）。

（写真：帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵）



若葉の森遺跡（帯広市）の発掘。平成14年（2002）。

（写真：帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵）



若葉の森遺跡の位置。帯広市西17条南6丁目。

見つかった石器を組み合わせると... 観察のポイント



石器作りのようす（再現）。



バラバラの石器を組み上げる。左上が組み上がった形。

（写真：帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵）

バラバラの石器を復元する

遺跡では石器が見つかったら、その位置やようすを細かく記録します。そして、石の「顔つき」を見ながら、パズルのように組み立てていきます。すると、どのように割って作られたのか、どんな大きさの石を使ったのか、どのくらい広がっていたのか、といったことがわかってくるのです。

大きさは9cmくらいの石

組み上がった石は、大きくてもおとなのにぎりこぶしくらいでした。河原にはもっと大きな石もあるのですが、これくらいの石がよく使われています。この石を、パカッと半分に分けたあと、ひたすらたたいて割っていたようです。

ないところが大切

組み合わせても、完全に一個の石にはならず、ところどころ、ぬけていました。ひたすらたたいて割ったあと、いいところを取り出して使ったのでしょう。

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん

2 帯広百年記念館埋蔵文化財センター（おびひろひやくねんきねんかんまいぞうぶんかざいセンター）：帯広市西23条南4丁目26 電話 0155-41-8731 日・月曜日休館